

2 展示

[概要]

歴博は、研究資源の収集と研究と展示とを有機的に連関させる「博物館型研究統合」として、研究の成果および情報の発信をおこなっている。展示については、総合展示および企画展示、特集展示、くらしの植物苑における特別企画、人間文化研究機構の基盤機関が連携して展示を企画・実施する連携展示などをその具体的な活動として挙げることができる。

総合展示はこれまで研究の進展に応じたりニューアルを実施してきている。本年度は第5室（近代）の全体、および第6室（現代）の一部のリニューアルが完了し2026年3月17日にリニューアルオープンした。また、2022年度からは第2室（中世）のリニューアル委員会が発足し、作業を開始した。

2025年度は企画展示1本、特集展示3本を実施した。

企画展示「野村正治郎とジャポニズムの時代—着物を世界に広げた人物」（2025年10月28日～12月21日）は、歴博を代表する収蔵品の一つである「野村正治郎衣裳コレクション」を中核に据え、コレクションを形成し、国内外に着物の美と重要性を発信した野村正治郎（1880-1943）の活動を紹介したものである。これにより当時の美術工芸品に関わる商業や学界の状況など、近代日本の歴史の一端を示すとともに、発信者側からの視点でジャポニズムをとらえていることが新機軸の展示となった。

特集展示は、第3展示室にて「生田コレクション 鼓胴」（2025年7月23日～8月31日）、「野村正治郎の後継者—賤男の活動」（2025年10月28日～2025年12月21日）、第4展示室にて「明治の神道家—旧幕臣秋山光條とその資料—」（2025年4月22日～7月27日）を開催した。このうち、「野村正治郎の後継者—賤男の活動」は企画展示「野村正治郎とジャポニズムの時代—着物を世界に広げた人物」を補完するものである。

くらしの植物苑の特別企画としては、「伝統の桜草」（2025年4月8日～4月30日）、「伝統の朝顔」（2025年8月6日～8月31日）、「伝統の古典菊」（2025年11月5日～11月30日）、「冬の華・サザンカ」（2025年12月2日～2026年2月1日）を開催した。

展示担当 小瀬戸恵美

企画展示等の実施

企画展示

「野村正治郎とジャポニズムの時代—着物を世界に広げた人物」2025年10月28日～12月21日

くらしの植物苑特別企画

「伝統の桜草」	2025年4月8日～4月30日
「伝統の朝顔」	2025年8月6日～8月31日
「伝統の古典菊」	2025年11月5日～11月30日
「冬の華・サザンカ」	2025年12月2日～2026年2月1日

特集展示

第3展示室 特集展示「もの」からみる近世

「生田コレクション 鼓胴」	2025年7月23日～8月31日
「野村正治郎の後継者—賤男の活動」	2025年10月28日～12月21日

第4展示室 特集展示

「明治の神道家—旧幕臣秋山光條とその資料—」	2024年4月22日～7月27日
------------------------	------------------

[総合展示リニューアル]

〈総合展示新構築〉

1. 第5室・第6室リニューアル委員会

(1) 概要

4月から施工業者及び施工監理業者との三者打合せを毎月開催し、作業の進捗確認や協議事項について検討を行った。8月からは第5展示室での本格的な工事を開始した。並行して施工業者と随時打合せを行いつつサイン・グラフィックの制作、デジタルコンテンツの制作、資料実測・演示具制作などを進めた。そして2026年2月24日に完了検査を実施し、すべての施工業務が完了されたことを確認した。

3月16日には総合展示第5室リニューアルオープン記念式典・内覧会を挙行し、海外を含めた多くの来賓が参加した。また、同日に総合展示第5室・第6室リニューアル委員会を開催し、館外委員・協力者と本プロジェクトの総括等について意見交換を行った。翌3月17日から新しい第5展示室を一般公開した。

関連行事として歴博フォーラムを8月と12月の2回開催した。なお、昨年度開催した歴博フォーラム「近代における人びとの労働とくらし」の内容をまとめた書籍が3月に刊行された。加えて、『REKIHAKU』のリニューアル特集号を3月に刊行した。

リニューアル展示開室後の成果と課題をまとめる作業のため、リニューアル委員会は1年継続することを決めた。またリニューアル委員会外部委員はじめ展示構築の過程で協力いただいた方々もふくめて、リニューアル展示の学問的成果を「国立歴史民俗博物館研究報告」のかたちで刊行することとなった。

(2) リニューアル委員会（全体会議）

2026年3月16日

(3) リニューアル委員会（館内会議）

2025年4月11日、4月25日、5月9日、5月30日、6月13日、6月27日、7月11日、7月25日、8月8日、9月12日、10月10日、11月14日、12月12日、1月9日、2月13日、3月13日

(4) 総合展示リニューアル運営会議

開催なし

(5) 施工業者・施工監理業者との三者打合せ（総合定例）

2025年4月25日、5月30日、6月27日、7月25日、8月29日、9月26日、10月31日、11月28日、12月26日、1月30日

2. 第2室リニューアル委員会

(1) 概要

1983年の開館以来、研究の進展にあわせて総合展示室のリニューアルを徐々に実施し、第3・4・1室は終了、第5・6室も2026年3月に新しい展示室を一般公開した。第2室は開館当初に設置されたにもかかわらず、1997～99年度に暫定改善を実施した程度で、本格的なリニューアル改善はおこなっていない。しかしこの40年間の中世史研究の進展には著しいものがあり、いつまでも現状の展示のままで置くわけにはいかないと判断し、2022年度からリニューアル委員会を発足することとなった。開室目標は2031年度（2032年3月）としていたが、本館の大規模改修計画と時期が重なったため、2035年度開室と4年延期することとなった。

これまでに、中世史研究の状況把握と、現状展示改善点の検討をおこなってきた。4年目の本年度は、これまで積み上げてきた研究会を踏まえて展示構想案のたたき台を呈示し、具体的な個別テーマの検討に入った。本来なら来年度に展示の基本設計のための準備を終える計画であったが、開室を延期したため、来年度以降も同様の方式の会議を重ねながら、さらに新たな研究テーマを模索しつつ展示構想案を作成していくこととする。

(2) リニューアル委員会（研究会）

2025年9月7日～9月8日 第1回研究会（歴博）

2025年11月22日～11月23日 第2回研究会（歴博）

2026年3月7日～3月8日 第3回研究会（歴博）

(3) リニューアル委員会（科研費との合同研究会）「中世東北の地域社会の研究」

2025年8月24日～8月26日 調査・研究会（いわき市、郡山市）

[企画展示]

企画展示「野村正治郎とジャポニズムの時代―着物を世界に広げた人物」

会期：令和7年10月28日（火）～令和7年12月21日（日）（開催日数：56日間）

1. 展示趣旨

本企画展示は、歴博を代表する収蔵品の一つである「野村正治郎衣裳コレクション」を通して、野村正治郎（1880-1943）の人物像を紹介するものである。

「野村正治郎衣裳コレクション」とは、京都の美術商であり、着物を中心に近世日本の染織品を収集していた野村正治郎が築きあげた服飾品・装身具の一大コレクションである。着物、衣桁にかかった着物をかたどって貼装した「時代小袖雛形屏風」、袖形に装幀した小袖裂など、その数は1000点を優に越えている。

正治郎が活躍した時期には、欧米でジャポニズムが最盛期を迎えていた。第1章では、美術商として西洋人を相手にした正治郎の販売戦略を見ていき、着物の美を国外に伝えたさまを辿る。

また当時、風俗史研究や産業振興にとって、正治郎のコレクションは有意義なものであった。第2章では、コレクターとして正治郎が日本国内で着物の重要性を啓発する役割を果たした様子について繙いていく。

以上のような2つの側面から、国内外に着物の美と重要性を発信した正治郎の生涯を、彼のコレクションとともに振り返る。

2. 展示構成と主な展示資料

・展示構成

プロローグ 野村正治郎と世界に広がる関係資料

第1章 美術商としての活動―対外交流

I：海外進出への足掛かり―母親志と松本文恭のオークション

II：次兄清英の活動

III：美術商としての正治郎

第2章 コレクターとしての活動―国内交流

I：コレクション形成の背景―入札会の盛行

II：学界への接近

III：コレクターとしての使命

エピローグ 活動の集大成

I：時代小袖雛形屏風の制作

II：ゴールデン・ゲート万国博覧会への出品

・主な展示資料

野村正治郎衣裳コレクション H-35 当館蔵

伝宮崎友禅自画像 協同組合加賀染振興協会蔵

長春花文字模様帷子 京都国立博物館蔵

時代裂大手鑑 J.フロント リテイリング史料館蔵

櫻下遊泳の図 成田山大阪別院明王院蔵

友白髪模様振袖 丸紅株式会社蔵

束髪斗模様振袖 友禅史会蔵

3. 刊行物

展示図録（A4変形判180頁）

展示解説シート（A4判4頁）広報用ポスター、チラシ

4. 関連行事

（1）報道向け内覧会 令和7年10月27日（月）

（2）第464回歴博講演会

①期 日 令和7年11月8日（土）13：00～15：00

- ②演 題 とある着物コレクターの生涯―野村正治郎の足跡
- ③会 場 歴博講堂
- ④講 師 澤田 和人
- ⑤参加者 91人

(3) ギャラリートーク

- ①期 日 2025年11月8日(土) 11:00～
講 師 澤田 和人
参加者 36人
- ②期 日 2025年11月22日(土) 11:00～
講 師 澤田 和人
参加者 48人
- ③期 日 2025年12月6日(土) 11:00～
講 師 澤田 和人
参加者 36人
- ④期 日 2025年12月21日(日) 13:30～
講 師 澤田 和人
参加者 54人

(4) オリジナル着物カードを作ろう！

2025年12月6日(土) 13:30～
歴博ガイダンスルーム
指導：共立女子大学家政学部被服学科被服平面造形研究室

(5) 歴博友の会会員向け展示解説

期 日 2025年12月8日(月) 10:30～
会 場 企画展示室A・B
講 師 澤田 和人

5. 成果と課題

本企画展示は、歴博を代表する所蔵資料の1つである「野村正治郎衣裳コレクション」を中核に据えた展示である。当該資料を活用したこれまでに開催した企画展示とは異なり、服飾史・染織史からの視点で資料を提示するのではなく、コレクションを形成した野村正治郎(1880-1943)の活動に焦点をあてて展示を構成した。それにより、当時の美術工芸品に関わる商業や学界の状況など、近代日本の歴史の一端を示すことができたものと考えている。「ジャポニスム」を展示を繙く鍵としたが、従来、ジャポニスムを扱う展示は、受容者側に注目したものとなっている。それに対し、本企画展示は発信者側からの視点でジャポニスムを捉えており、それは新機軸といえるものである。

海外に所在する日本染織コレクションの調査研究に従事した経験のある研究者で展示プロジェクト委員会を組織し、展示の構成を検討した。各委員は海外における日本染織のもつ意義についての研究論文を発表しており、展示資料の選択にはそれらが反映されている。それゆえ、最新の知見を根拠資料とともに示してみせるものとなっているが、展示資料には初公開資料や新出資料が多数含まれていた。

また、関連イベントとしてワークショップ「着物カードをつくろう！」を行い、共立女子大学家政学部被服学科被服平面造形研究室的協力のもとに若手研究者が指導役となり、展示資料および着物についての一般の興味の喚起を促した。

関連展示として第3室特集展示「野村正治郎の後継者―賤男の活動」を同時に開催した。それは、近年新たに収蔵した資料を主軸に館蔵資料を公開するものであった。企画展示の内容を補うのみならず、歴史資料・文化資料の保全のためには、博物館の果たす役割が大きいことを伝えることを試みた。

本企画展示は、コレクションが形成されること自体にも歴史的な意味があるものとしてテーマ設定を行ったが、服飾史や染織史からの視点で展示する通例の着物展示を期待する来館者にとっては馴染みにくいものであったことは否めない。それは当初から認識していたことではあるが、可能な限り焦点を絞り込んだテーマ設定としたため、衆望に添うことを選択しなかった。しかしながら、着物に関する解説パネルを設置するなど、ひと工夫する余地は

あった。

6. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、千葉日報等、記事数31（2026年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

歴史道Vol.41, 芸術新潮10月号, 歴史人11月号, 歴史街道11月号, 美術の窓11月号, 日経ウーマン12月号, 美しいキモノ冬号, 週刊文春12月4日号, eclat 1月号, 博物館研究12月号等, 37誌（2026年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」 1番組（2026年3月末）

【その他】

IM（インターネットミュージアム）、美術手帖、美術展ナビ、FASHION PRESS、装苑SO-EN ONLINE、婦人画報、artscape、Sfumart、ARTAGENDA、TOKYOARTBEAT、朝日新聞、毎日新聞、千葉日報 他ウェブ掲載 47件（2026年3月末）

【くらしの植物苑特別企画】

「季節の伝統植物」

春：伝統の桜草	2025年4月8日（火）～4月30日（水）（20日間）
夏：伝統の朝顔	2025年8月6日（水）～8月31日（日）（24日間）
秋：伝統の古典菊	2025年11月5日（水）～11月30日（日）（25日間）
冬：冬の華・サザンカ	2025年12月2日（火）～2026年2月1日（日）（44日間）

1. 展示趣旨

江戸時代に隆盛をきわめた園芸文化は、日本独自の感性と高度な技術により、多種類の植物群にわたっておびただしい品種群を作り出してきた。それらの多くは明治時代以降の西洋園芸の急速な普及によって失われ、かつての園芸技術も消滅しようとしている。この特別企画は、絶滅に瀕している古典園芸植物の系統の探索と維持、生物学的な基礎研究と歴史的な基礎研究の融合を行い、その成果を展示として公開するものである。

2. 展示構成と主な展示品

特別企画「季節の伝統植物」では、四季に関わる4つの園芸植物を展示した。

春：「伝統の桜草」とは、江戸時代中期以降、園芸家によって野生種の中から変わった花が探し出され、多くの品種が生み出されてきた一連の桜草をさす。今年度は『櫻草作傳法』を読む一桜草連（同好会）を中心に―をテーマに、作傳法に記された桜草連の成立の過程や、品評会における桜草の等級について紹介した。桜草連は、文化年間の初期には結成されており、毎年、桜草の見頃となる八十八夜（5月のはじめ）頃に品評会を開いていた。

夏：「伝統の朝顔」とは、江戸時代以降になると、文化・文政・天保期、嘉永・安政期、明治・大正期など、繰り返し朝顔ブームが訪れ、そのたびに葉と花の多様な変化や組み合わせを楽しむために作り出されてきた変化朝顔を意味する。今年度は、「幕末の変化朝顔」と題して、嘉永・安政期に都市部を中心に展開した変化朝顔の第二次ブームについて、最新の遺伝子研究の成果も駆使しつつ、当時のアサガオの実態や育種技術の紹介を行った。特に1853年に大坂で出版された『朝顔花併』と1861年に江戸で出版された『朝閑々美』に紹介された朝顔図を参照しつつ、当時、人気の高かった変化朝顔の特徴を検証した。

秋：「伝統の古典菊」とは、筆先のような花弁をもつ「嵯峨菊」や花弁の垂れ下がった「伊勢菊」、花弁のまばらな「肥後菊」、花弁が咲き始めてから変化していく「江戸菊」のことである。これらに花の中心が盛り上がり咲く丁子菊を加えた伝統的な中輪種は「古典菊」と呼ばれている。今年度は「菊の栽培書を読む一栽培用具を中心に―」をテーマに、江戸時代の菊の栽培に用いた各種の栽培用具を、当時の菊栽培の指南書、『後の花』と『菊経』を資料として紹介した。これらの栽培道具の多くは、園芸全般に使われる道具が記されているが、他方で苗床作りのための道具は、菊ならではの特徴として重要であったと考えられる。

冬：サザンカは、自生種に近い「サザンカ群」、獅子頭の実生またはその後代と考えられている「シシガシラ（カンツバキ）群」、サザンカとツバキの間で自然にできた雑種またはその後代と考えられている「ハルサザンカ群」の3グループに大別されるが、花はグループごとに10月中頃から翌年2月にかけて上記の順に咲いていく。人とサ

ザンカの関わりを遺伝資源と文化的な資産の両面から着目して展示した。

3. 主な行事

特別企画「季節の伝統植物」に関連した観察会

2025年 4月26日（土）：第311回「『櫻草作傳法』を読む—桜草連（同好会）を中心に—」	水田 大輝
8月23日（土）：第314回「幕末の変化朝顔」	仁田坂英二
11月22日（土）：第317回「菊の栽培書を読む—栽培用具を中心に—」	平野 恵
12月20日（土）：第318回「名前からひもとくサザンカの伝播」	加地 典子

苗の有償頒布〔桜草：4月8日（火）～4月30日（水）、朝顔：6月28日（土）・29日（日）、菊：7月19日（土）・20日（日）〕

4. 成果と課題

「伝統の桜草」では、近世の桜草同好会の形成過程を紐解き、品定めにおける桜草の細分化された等級が示されたことで、園芸植物としての桜草の歴史的背景を紹介することができた。

「伝統の朝顔」では、幕末の変化朝顔のブームを掘り下げることで、当時、好まれた品種の特徴を図譜から読み解くとともに、現代の植物学的見地から当時の品種改良の技術水準を紹介することができた。

「伝統の古典菊」では、菊の栽培書から、当時の菊栽培に用いられた道具類の諸相について紹介することができた。その多くは一般的な道具類であったが、庶民への菊栽培の広がりを示すものでもあった。

「冬の華・サザンカ」では、サザンカという名称について、日本と中国における解釈の違いや名称の混乱を中心に紹介した。名前の変遷を通して、サザンカの自生分布域の特徴やその受容の歴史的過程を紹介することができた。

5. マスコミでの取り上げ

【新聞】

読売新聞、毎日新聞、東京新聞、産経新聞、千葉日報、花卉園芸新聞、全私学新聞等、記事数27（2026年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

NHK趣味の園芸8・12月号、園芸ガイド2026冬号、園芸JAPAN7・8・9・12・1・2月号、月刊ぐるっと千葉5・8月号等、50誌（2026年3月末）

【テレビ・ラジオ】

newsチバ、ウィークリー千葉県等、3番組（2026年3月末）

【その他】

みんなの趣味の園芸、じゃらんnet、dメニューニュース、レッツエンジョイ東京、チバテレ+プラス 他ウェブ掲載 42件（2026年3月末）

6. 展示プロジェクト（◎：代表、○副代表）

（館外）

仁田坂英二	九州大学大学院理学研究院・准教授
平野 恵	台東区立中央図書館・専門員
岩淵 令治	学習院女子大学・教授
水田 大輝	日本大学生物資源科学部・専任講師

（館内）

青木 隆浩	本館研究部・准教授
日高 薫	本館研究部・教授
○澤田 和人	本館研究部・准教授
◎川村 清志	本館研究部・准教授
山村 聡	本館管理部・専門職員

[特集展示]

第3展示室「生田コレクション 鼓胴」

2025年7月23日（水）～8月31日（日）

1. 展示趣旨

生田コレクションは、明治から大正期、ビール産業の草創に貢献した人物として知られる生田秀（1857-1906）と、その長男で鼓胴研究に勤しんだ生田耕一（筒哉，1882-1933）とが、2代にわたり収集した能楽関係コレクションである。能においては、小鼓・大鼓・太鼓・能管という性格の異なる四種の楽器が用いられるが、本コレクションの中核をなすのは小鼓胴，すなわち小鼓の本体にあたる音を共鳴させるための筒92点である。能楽を代々家業とした家や大名家等に伝来した資料とは異なり、研究的な視点によって集められたため、流儀（流派）の好みに偏らず、室町時代初期から大正時代という幅広い制作年代の鼓胴を含む、系統だったコレクションである点に特色がある。

今回の特集展示では、音楽・楽器史、技術史、美術史の研究資料として高く評価されてきた生田コレクションから小鼓胴・大鼓胴・太鼓胴ほか主要な資料を展示する。鼓胴内部の鉋目に象徴される楽器製作技術や、鼓胴表面に施された多彩な蒔絵装飾、コレクションの成立背景などを通じて、室町時代から江戸時代にかけて発展・興隆し、さらに近代に受け継がれて現在もなお伝統芸能として生き続ける能楽文化の一端を紹介する。

2. おもな展示資料

生田コレクション鼓胴（H-1796）より（本館蔵）

菊唐草蒔絵小鼓胴
真葛蒔絵小鼓胴
源氏夕顔蒔絵小鼓胴
栗蒔絵大鼓胴
紫陽花蒔絵太鼓胴
能管 銘「鳳凰竹」
桜花蒔絵鼓箱 など

生田耕一・山崎楽堂著『鼓筒之鑑定』わんや謡曲書肆，1917年（個人蔵）

鼓筒研究会著『鼓筒圖譜』能楽編輯所，1918年（個人蔵）

など約100点

3. 関連行事

・展示解説会 2025年7月23日（水）

会 場：第3展示室

参加者：49名

4. 刊行物

展示解説シート（A4判4頁，カラー），広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

今回の特集展示は、平成22年度の本館受入れ以来、部分的にしか展示する機会がなかった生田コレクションの全貌を紹介する目的で開催した。観覧者がコレクションの全体像を把握し、その多面的な意義を理解できるように構成し、各コーナーにおいて、鼓胴表面の装飾、楽器（音響体）としての鼓胴の素材・構造・制作、能楽に用いられる各種楽器、近代における能楽継承における収集家親子の役割などについて解説した。能楽や鼓についての知識がなくとも鼓の特徴や魅力などが伝わるように心がける一方で、鼓胴の構造やコレクション生成の経緯等について深く理解できるような展示内容も含めた。来館者からは、美しい鼓胴の数に圧倒された、楽器としての鼓の時代的な変化がわかったなどの反応があり、所期の目的は概ね達成できたと感じている。

その一方で、多くの専門的な解説が必要な分野であるため、細部に至るまで正確な理解を促すような展示とすることはできなかった。展示ケースの大きさに対して資料の数が多過ぎ、キャプションの文字が小さく見づかったこと、多くの要素を盛り込みすぎたことなども反省点である。限られたスペースにおける特集展示においては、あ

る程度テーマを絞った見せ方が必要であったかもしれない。

展示室内にはタッチパネルを設置し、すべての資料の多方向からの画像やX線透過撮影画像を見られるようにした。鼓の音については、展示室内で音を鳴らし続けることが見学の妨げになることを懸念し、学術交流協定を締結している日本芸術文化振興会の協力を得て、「文化デジタルライブラリー」の「演奏図鑑鼓（つづみ）」を紹介するにとどめた。

なお、佐原雛子保存会や、小鼓方大倉流の大倉源次郎氏（人間国宝）、コレクション旧蔵者の家族等が来訪した交流の場において、本コレクションや鼓胴について多くの価値ある情報を得ることができた。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

毎日新聞、東京新聞、千葉日報、聖教新聞等、記事数10（2026年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

月刊ぐるっと千葉7・8月号、博物館研究8月号、月刊新松戸7月号等、10誌（2026年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」1番組（2026年3月末）

【その他】

FASHION PRESS, ARTAGENDA, 能楽マガジンNoh+, 美術手帖 他ウェブ掲載 16件（2026年3月末）

7. 展示プロジェクト（◎：代表）

〔館内〕

◎日高 薫 本館研究部・教授

内田 順子 本館研究部・教授

第3展示室「野村正治郎の後継者—賤男の活動」

2025年10月28日（火）～12月21日（日）

1. 展示趣旨

本特集展示は、企画展示「野村正治郎とジャポニスムの時代—着物を世界に広げた人物」と同時に開催し、その内容を補完するものである。

野村賤男（1902-1987）は、京都の美術商であり小袖を中心とする近世日本の衣裳の蒐集家でもあった野村正治郎（1880-1943）が築きあげた服飾品・装身具の一大コレクションを継承した人物である。旧姓を森下といい、日系2世のアメリカ移民であった。1930年に正治郎の一人娘の政江（1904-1986）と結婚して野村家の入り婿となり、正治郎の後継者となった。しかし、戦後、譲り受けた事業をやめ、1954年に賤男一家はアメリカに移住してしまう。それに伴い、正治郎のコレクションの主要な一群はアメリカに送られたが、本館の設立に際し、里帰りを果たした。

本特集展示では、裏面におされた印章から、賤男が制作にかかわったと見られる3点の小袖裂貼装屏風を紹介する。それとともに、賤男の足跡をたどり、戦後の文化財の移動と行政についても考えていく。

2. おもな展示資料

小袖裂貼装屏風（6点貼装） H-35-1204 本館蔵

小袖裂貼装屏風（8点貼装） H-35-1205 本館蔵

小袖裂貼装屏風（7点貼装） H-35-1206 本館蔵

写真：オーキッドツリーを植樹する野村賤男とマイアミ市長 個人蔵

など約20点

3. 関連行事

・展示解説会 2025年10月27日（月）

※企画展示「野村正治郎とジャポニスムの時代—着物を世界に広げた人物」内覧会と同日開催

会 場：第3展示室

参加者：33名

4. 刊行物

展示解説シート（A4判4頁，カラー），広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

同時開催の企画展示の内容を補完する内容であるものの，文化財の移動や文化行政との関わりなど，近現代における文化財の受容史の側面から取り上げた点に新機軸があった。戦前戦後の日本の文化や美術工芸品に対する国内外の評価，文化庁や博物館が果たした役割について，一般には知られていない事柄を紹介できたものと思われる。また，併せて，日系アメリカ移民についても，彼らの活動の一端を具体的に示すことができた。

その一方で，染織史・服飾史的な観点からは展示を行わなかったため，モノ資料としての様式や技法等の解説を付していなかった。観覧者の多様な関心と要求に応える配慮が必要であったことが，反省すべき点としてあげられる。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

東京新聞等，記事数4（2026年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

KIRACO9・10月号/11・12月号，歴史道Vol.41，芸術新潮10月号，日経ウーマン12月号等，5誌（2026年3月末）

【その他】

美術展ナビ，美術手帖，装苑SO-EN ONLINE，IM（インターネットミュージアム），千葉日報 他ウェブ掲載8件（2026年3月末）

7. 展示プロジェクト（◎：代表）

◎澤田 和人 本館研究部・准教授

第4展示室「明治の神道家―旧幕臣秋山光條とその資料―」

2025年4月22日（火）～7月27日（日）

1. 展示趣旨

所蔵者から預かり，2007年から当館で長く借用している資料について，その概要を紹介するのが目的である。当該資料は，幕末には江戸町奉行配下の同心をつとめ，維新後は神官として各地の神社に勤務した国学者・神道家秋山光條（1843-1902）の子孫宅に伝来したものであり，文書・書籍・書画などからなる。父祖の代からの町奉行所関係文書のほか，前田夏蔭・平田鍬胤に師事したことから，国学・神道関係が多いのが特徴で，また同学の人物から秋山に宛てた書簡なども少なくない。一部については過去，学習院大学史料館や当館企画展示（「学びの歴史像―わたりあう近代―」）などで展示されたことがあるが，資料総体を対象とした展示・紹介は今回が初めてとなる。

2. おもな展示資料

〔江戸町奉行所関係〕定廻臨時廻勤方書留，御立合もの書留，秋山和光日記

〔明治期神道関係〕教場必携（1874年），日要新聞（1872-74年），八阪神社記（1895年），創神道教導職教会結社議，光文庫設立大意（1883年）

〔国学関係の書籍〕蔵書目次牒，好古雑誌（1881-83年），好古叢誌（1892-97），渚廬屋集（1890年），明治千人一首（1898年）

〔書簡や書跡〕福羽美静，井上頼閑，小杉樞邨，権田直助，福住正兄，松浦武四郎，高崎正風，八田知紀，千家尊福，西村茂樹，前田夏繁，小中村清矩

3. 関連行事

・展示解説会 2025年4月22日（火）

会 場：第4展示室

参加者：34名

・ギャラリートーク4回

(2025年5月10日 11:00, 13:00, 6月7日 11:00, 13:00)

4. 刊行物

展示解説シート (A4判8頁, カラー), 広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

ほぼ初公開ともいえる資料の全体像を, 限られた展示スペースに見合った形で, 簡潔に展示・紹介することができた。秋山光條は一般的にはそれほど知名度が高くない人物であるが, 資料そのものが持っている歴史的価値とともに, 幕臣研究や国学史・神道史といった分野への広がりをも包摂することから, 強い関心を抱いた観覧者に来てもらうことができたといえる。また何よりも, 本展の開催がきっかけとなり, 長らく借用の状態になっていた秋山光條関係資料(約750点)そのものが, 当館へ寄贈されることとなったのは意義深いことであり(さらに2025年度には約200点が追加寄贈), 今後も新たな研究・展示への展開が想定される。

著名な国学者・歌人のものなど, 秋山光條宛の書簡を多数展示したが, そのキャプションには全文の解説は含まなかった。観覧者にとっては, 内容の詳細を活字化された形で読むことができれば, より理解が深まったのかもしれない。もともと立体的な資料は少なかったため, 展示した多くが平面的な文字資料であり, その点では物足りなさを感じた観覧者もいたと推測される。また, 各コーナーの資料の多寡などのため, ケースの配置とコーナーの順序がうまく合致させられず, 解説する上での不便(観覧者にとっては理解する上での)が生じた。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞, 東京新聞, 千葉日報等, 記事数8 (2026年3月末)

【雑誌・ミニコミ誌】

東京人6月号, 歴史街道6月号, 歴史人6月号, 月刊ぐるっと千葉5・6・7・8月号等, 26誌(2026年3月末)

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」他3番組(2025年3月末)

【その他】

artscape, ARTAGENDA, TOKYOARTBEAT 他ウェブ掲載 15件(2026年3月末)

7. 展示プロジェクト(◎:代表)

◎樋口 雄彦 本館研究部・教授

[展示プロジェクト委員会]

企画展示「野村正治郎とジャポニズムの時代―着物を世界に広げた人物」

1. 展示プロジェクトの趣旨

本企画展示は, 歴博を代表する収蔵品の一つである「野村正治郎衣裳コレクション」を通して, 野村正治郎(1880-1943)の人物像を紹介するものである。

「野村正治郎衣裳コレクション」とは, 京都の美術商であり, 着物を中心に近世日本の染織品を収集していた野村正治郎が築きあげた服飾品・装身具の一大コレクションである。着物, 衣桁にかかった着物をかたどって貼装した「時代小袖雛形屏風」, 袖形に装幀した小袖裂など, その数は1000点を優に越えている。

正治郎が活躍した時期には, 欧米でジャポニズムが最盛期を迎えていた。第1章では, 美術商として西洋人を相手にした正治郎の販売戦略を見ていき, 着物の美を国外に伝えたさまを辿る。

また当時, 風俗史研究や産業振興にとって, 正治郎のコレクションは有意義なものであった。第2章では, コレクターとして正治郎が日本国内で着物の重要性を啓発する役割を果たした様子について繙いていく。

以上のような2つの側面から, 国内外に着物の美と重要性を発信した正治郎の生涯を, 彼のコレクションとともに振り返る。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

第5回 2025年10月28日

田中淑江氏によるワークショップ「着物カードをつくろう！」の開催計画案の検討、および、内覧会。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

〔館外〕

小山弓弦葉 東京国立博物館・学芸研究部調査研究課・課長

田中 淑江 共立女子大学・教授

リンネ・マリサ 京都国立博物館・学芸部調査・国際連携室・主任専門職

〔館内〕

◎澤田 和人 本館研究部・准教授

○日高 薫 本館研究部・教授

企画展示「アイヌ民族と博覧会 ―150年の経験―」

1. 展示プロジェクトの趣旨

1851年に開催されたロンドン万国博覧会は近代的な博覧会の幕開けとなり、以降、大小様々な博覧会が世界各地で開催されてきた。アイヌ民族と博覧会の関わりは、1872年の湯島聖堂博覧会におけるアイヌ民族関連資料の展示を始まりとする。さらに、1903年の第五回内国勧業博覧会や1904年のセントルイス万国博覧会など、複数の国内外の博覧会で、アイヌ民族自身が「人間展示」という形で出場していた。その後、アイヌ民族は、昭和戦後期の地方博覧会をはじめ、1970年の大阪万博から2025年の大阪・関西万博に至るまで様々な博覧会に参加し、アイヌ民族と博覧会の関わりは現在に至るまで続いている。

こうした博覧会に、どのような関係性、あるいは状況のもとにアイヌ民族は出場することになったのか。また、出場するにはいかなる理由があったのか。そして、出場者、出品者として関わったアイヌ民族は、自らの置かれた状況をどのように捉えたのか。さらに、見る側と見られる側のまなざしはどのように交錯していったのか。

本展示では、帝国主義や殖産興業を背景に行われてきた博覧会に係わったアイヌ民族や和人に焦点をあて、個人にとっての博覧会がいかなるものであったのかを考える機会とする。なお本展は、国立歴史民俗博物館と国立アイヌ民族博物館との共同開催で実施するべく準備を進めている。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

【おもな打ち合わせ・調査】

第1回打ち合わせ（2025年6月5日，オンライン）

図録，展示資料の確認，担当箇所を進捗状況の確認など

第2回打ち合わせ（2025年8月28日，オンライン）

進捗状況の確認

第3回打ち合わせ（2025年9月3日，オンライン）

図録打合せ（仕様，構成，スケジュール等）

第4回打ち合わせ（2025年9月10，11日，オンライン）

協約書，資料リスト等について

第5回打ち合わせ（2025年10月2日，オンライン）

進捗状況の確認

第6回打ち合わせ（2025年10月11日，対面）

藤戸康平作「Singing for the Future」の運搬・設営に関する調査および展示計画についての打ち合わせ

第7回打ち合わせ（2025年10月30日，対面）

公益社団法人北海道アイヌ協会にて本企画展示の趣旨等の説明，後援等にかかる打ち合わせ

第8回打ち合わせ（2025年11月21日，オンライン）

国立アイヌ民族博物館におけるメインビジュアルについて

第9回打ち合わせ（2025年11月27日，オンライン）

「声」の構成案について

第10回打ち合わせ（2025年12月24日，オンライン）

国立アイヌ民族博物館におけるメインビジュアル，各担当箇所を進捗状況の確認

第11回打ち合わせ（2025年1月16日，オンライン）

進捗状況の確認等

第12回打ち合わせ（2026年1月24日、オンライン）

国立アイヌ民族博物館における平面構成、パネルの配置等

第13回打ち合わせ（2026年2月20日、オンライン）

各章におけるグラフィックパネルのバランスについて

第14回打ち合わせ（2026年2月25日、オンライン）

図録について

第15回打ち合わせ（2026年3月4日、対面）

資料撮影、寄託資料についての表記、展示替え予定、パネルに用いる画像・図録表紙に使用する画像の確認等

第16回打ち合わせ（2026年3月20日、対面）

図録のレイアウト等の調整

【資料撮影】

尼崎市立歴史博物館（2026年3月26日）および乃村工藝社（2026年3月27日）にて図録のための撮影を実施した。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

〔館外〕

- 立石 信一 国立アイヌ民族博物館・教育普及室室長補佐
- 関口 由彦 国立アイヌ民族博物館・展示企画室室長
- 是澤 櫻子 国立アイヌ民族博物館・展示企画室研究員
- 川上さやか 国立アイヌ民族博物館・教育普及室学芸員
- 山崎 幸治 北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授
- 三浦 泰之 北海道博物館・学芸部長
- 田村 将人 文化庁企画調整課・アイヌ文化振興調査官

〔館内〕

- 川村 清志 本館研究部・准教授
- ◎内田 順子 本館研究部・教授

企画展示「旗本とはなにか」

1. 展示プロジェクトの趣旨

近年、徳川政権の中核を担った旗本に関する研究が急速に進められている。これまで旗本知行所の資料を主として行われたきたのに対し、旗本家の資料を対象した調査・研究が行われるようになったためといえる。現在にまで伝わる旗本家資料は少なく史料制約が大きいので、研究がほとんど行われていなかったが、近年、当館に旗本家資料が複数寄贈・寄託され、その調査・研究が行われることで、旗本研究の拠点ともなりつつある。そこで、旗本家の資料群の構造と特質という視点から、近世の旗本について解き明かすものである。

本企画展示は、2019～2021年度の館蔵資料型共同研究「番方旗本家に関する総合的研究―大番士・儒者杉原家文書を中心に―」の成果をベースにしたものである。さらに、館内・館外の旗本家資料の調査を通じて、職務の実態、政治的活動から、その基盤となる思想・教養、文化活動など、旗本の個人・家の存立形態と取り巻く政治・社会状況を多角的に解き明かし、最新の研究成果について文書・モノ資料を駆使して、展示として公開するものである。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

会議を2回実施し、旗本関係の資料群に関する概要把握と展示資料としての検討を行った。また、東京都公文書館、千代田区教育委員会などにおいて資料の調査を実施した。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

〔館外〕

- 岩淵 令治 学習院女子大学・教授
- 小粥 祐子 崇城大学・准教授
- 小池 駿介 淑徳大学アーカイブズ・専門員
- 澤村 怜薫 行田市郷土博物館・学芸員

高木まどか 東海大学・特任講師
 高橋 喜子 徳川林政史研究所・非常勤研究員
 高久 智広 関西大学・教授
 中谷 正克 株式会社NXワンビシアーカイブズ・主事
 中村 陽平 埼玉県教育局・主査
 野本 禎司 開智国際大学・准教授
 ○三野 行徳 昭和女子大学・准教授
 (館内)
 ◎工藤 航平 本館研究部・准教授
 福岡万里子 本館研究部・准教授
 鷲頭 桂 本館研究部・准教授

企画展示「東アジアの耕織図」

1. 展示プロジェクトの趣旨

本企画展示では、日韓の「耕織図」の比較をとおして、両国の「耕織図」がたどった様式や画題等の歴史の変遷と、そこから読み取ることのできる両国における社会的、文化的背景の特徴を明らかにする。従来は等閑視されてきた、日韓双方における「耕織図」の比較研究の成果から、東アジアに伝播した「耕織図」の受容の様相を美術史学、歴史学、民俗学の観点から示す。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

本企画展示は韓国国立民俗博物館との国際交流事業「日韓共同による民俗研究の新構築」(2023～2027年度)および本館共同研究「東アジアにおける文化の伝播と地域的展開に関する学際研究―「耕織図」の日韓比較を中心として―」(2025～2027年度)の成果にもとづいて実施する。したがって、展示プロジェクト委員会は歴博の研究者に加え、韓国国立民俗博物館の研究者や日本の大学をはじめとする研究機関の研究者から構成されている。美術史学、歴史学、民俗学、建築学等を専門とする学際的、国際的なメンバーからなることが特徴である。

3. 展示プロジェクト委員 (◎：開催館の代表)

[館外]

キム・ユンジョン 韓国国立民俗博物館・学芸研究官
 ジョン・ヨンハク 韓国国立民俗博物館・学芸研究官
 ヨム・フィジェ 韓国国立民俗博物館・学芸研究士
 イ・スヒョン 韓国国立民俗博物館・学芸研究士
 ジョ・スヒョン 韓国国立民俗博物館・学芸研究士
 植松 瑞希 東京国立博物館学芸研究部・主任研究員
 近藤 大知 飯田市美術博物館・学芸員
 武井 弘一 金沢大学人間社会研究域学校教育系・教授
 水野 裕史 筑波大学芸術系・准教授
 大久保純一 国立歴史民俗博物館・名誉教授

[館内]

関沢まゆみ 本館研究部・教授
 工藤 航平 本館研究部・准教授
 ○鷲頭 桂 本館研究部・准教授
 ◎松田 陸彦 本館研究部・教授

企画展示「大葬式展 (仮)」

1. 展示プロジェクトの趣旨

1990年代以降、葬儀や墓のあり方が大きく変化し、社会的関心も高まっている。これは高度経済成長期に全国的に普及した告別式や家族墓を基盤とした葬儀形態が、家族構造の変化やグローバル経済化などによって維持できな

くなったためであり、直葬や散骨など多様な変化が生まれるとともに、行政が対応する死者の増大などの現象も生じている。本展示では、仏式葬儀の形成とともに、家を基盤として、葬送儀礼がどのように展開し、また変容して、現代の状況を迎えるのか、また民俗的な多様性とその後の展開などを含めて提示する。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

第1回 2025年5月9日（金）オンライン

展示の趣旨および開催までのスケジュールを確認した後、展示構成案や資料リスト案の作成など、今後の具体的な進め方について意見交換を行った。

第2回 2025年12月21日（日）本館（対面）

展示構成案について議論し、各委員の分担や課題について検討を行った。また、館蔵資料のうち葬送墓制などの関連資料について調査を行った。

第3回 2026年2月15日（日）本館（対面）

展示資料について各委員から提案があり、意見交換を行った。それらと前回の内容をふまえて、展示構成案の検討を進めた。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

〔館外〕

瓜生 大輔 芝浦工業大学・准教授

大場 あや 日本学術振興会・特別研究員（PD）

朽木 量 千葉商科大学・教授

土居 浩 ものつくり大学・教授

問芝 志保 東北大学大学院・准教授

徳野 崇行 駒澤大学・准教授

〔館内〕

上野 祥史 本館研究部・准教授

工藤 航平 本館研究部・准教授

◎山田 慎也 本館研究部・教授

○吉村 郊子 本館研究部・助教

鷲頭 桂 本館研究部・准教授